図書館だより
文化学園図書館

文化女子大学・文化ファッション大学院大学
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.150

2010年6月21日発行
東京都渋谷区代々木3～22～1
TEL.03-3299-2395
FAX.03-3299-2604

「わからない」からわかること

文化女子大学教授（色彩学担当）　大関　徹

わからないものの代表。そのひとつは外国語でしょうか。ポルトガルのポルトという港町に行ったときのことです。一仕事終わり、路地裏のごく小さな店に入ることにしました。

飲み物は通じるだろうと英単語を並べてみました。が、そこでは英語がまったく通じません。かろうじてフランス語の“bière（ビエール）”（=ビール）が通じ、まずは一安心。ほっとして、客を眺めると、あつあつの鉄鍋に山と盛られたシシトウのオリーブオイル炒めを食べている家族がいます。その艶やかなグリーンのなんて美味しそうなこと!

食べたい! でも言葉がわかりません。そこで、客の食べ物を指さし、注文をしようと考えました。

まずは店員にアイコンタクト。客のシシトウ炒めを指さす。もう一度店員にアイコンタクト。自分の口に指をもってくる。さあ、オーダーは完璧なはず。

すると次の瞬間、その客がにわかに動き出しました。何を思ったか、突然満面の笑みで大きく頷きながら、自分たちのシシトウ炒めを小皿に盛りつけ始めたのです。そして皿にあふれんばかりの山盛りのシシトウ炒めを持ち、「ボン・アペチッチ（召し上がれ）!」と、私に差し出したのでした。

ところで、人の頭の中もわからないもののひとつです。私の義父は老いるにつれ、ときおり激しい思い込みや激怒をするようになりました。年のせいで気性の激しさがさらに進んでしまったのか、ずいぶん怖くなったものだなと思っていました。

しばらくして、義父との家族旅行で銭湯に入ったときのことです。義父はどうやら手桶に注ぐお湯をどのようにしたら蛇口から出せるかわからないようでした。「徹君、お湯はどうしたら出ますか」と、驚いている私に何度もすまなそうに尋ねるのです。しかし何度教えてもすぐに忘れてしまいます。部屋に帰ると、「ここはどこですか。泊めてもらえるんですか」とやはり何度も訊くのです。

そのとき私は初めて気付きました。激しい思い込み、激怒は、忘却に対する恐怖を打ち消すためだったのだと。怖かったのは、激怒される家族ではなく、忘却が深まっていく義父自身だったにちがいありません。

わからない外国語のおかげでわかった見知らぬ人の大らかな優しさ。表面上の言葉ではわからなかった義父の深い不安。わからないものを通じてこそ、わかるものが現れてくる。そんなことを強く感じています。

柴田 翔著 『されどわれらが日々』

文化服装学院教授（アパレル品質論担当） 志村 純子

小学生の頃、両親に買ってもらった世界少年少女文学全集を自分の２段ベッドに寝ころびながら読んでいた。厚みのあるハードカバーの装丁で、両手で支えた本の重みと目が悪くなると注意されたことなどを懐かしく思い出す。

大学に進学するため、甲府の実家を出て上京する。私たちは、団塊の世代のすぐ後の世代である。小・中・高校とも50人以上の大人数のクラス編成であり、教科書無償配布は下の学年からであった。高校の卒業式にはほんの1～2名だが、ベ平連（ベトナムに平和を! 市民連合）の学生運動家が式をボイコットしようと呼びかけていたのを思い出す。どこの大学の入り口も当たり前のように立て看板に政治的な内容と平和運動に関する呼びかけが掲げられているような状況であった。

この本を読んだのは、裏表紙のメモからすると大学の1、2年生19歳の頃のようである。

学生運動の中で、青春時代を過ごした若者達の恋愛、思想、挫折などを描いている。かなり重い内容であり、こんな本をあの頃読んでいたのだなあと思うがそんな時代でもあった。

思想や観念の中のみで考え行動したために、「本当の自分とは」や「信じるべきものは何であったのか」がわからなくなり、苦しむ登場人物達。

人間に行動を起こさせる原点は何によるのであろうか? 行動の人として思うのは父である。山梨の大学で教鞭を執っていた。専門は土壌肥料の微量栄養素であるシリカだったが、小さい頃は理解できず、沼にいるドジョウと勘違いしていた私であった。かなり型破りな人間で、母とのなれそめの時にも一緒に乗っていた汽車の煙について、母は「きれいな白い煙ですね!」と言ったらしいがそれに対し父は、「水蒸気とカーボンの化合物ですよ!」と言ったという逸話を聞かされた。様々な問題意識を持ち、涙もろく弱きを助け、強きを挫（くじ）くといった父の人柄を慕い、研究室には多くの人間が出入りしていた。「次郎は太郎を超えて行け」も口癖のひとつである。卒論を見ていた学生たちなどを食事時や夜遅く、突然自宅に連れてきて熱く議論を交わしていたのを見て育った。母はかなり苦労したのではないかと思う。

その父は、平和に対する意識も高く、私も小さい頃平和行進の列の中に連れて行かれた。２年前にノーベル物理学賞を受賞された益川敏英博士も科学者として科学によって原爆がつくられてしまった反省から科学技術は平和のために使うべきで、それを恩師から受け継ぎ自分も伝えてゆく責任があるとおっしゃっていた。父も同様の考えで行動していたように思う。

また、水俣病やイタイイタイ病が工場排水に原因があることを、科学者として弱い人間や環境を守る立場から問題解決のために取り組んだり、地元の農業者と連携しながら現場で改善を重ねたり、水耕栽培の試みをずいぶん以前から行っていた姿を思い出す。現実をより具体的に見据え、血の通った人間としての感情を忘れずに生きた人だと思う。

人の幸せとは何なのだろうか。家族を得て、子どもを生み育て、信頼できる友人をもつこと、生きた証、自分の思いを伝えること……?

この本の中に「最後に、人間が死を迎えるとき、命が消える瞬間ひとは何を思うのでしょうか」と言う問いが何カ所も出てくる。その問いの結果、人生の方向も変わる重い問いかけだ。

自分らしく行動し良い顔でその時を迎えられるよう過ごしてゆきたいものである。

・文藝春秋刊『芥川賞全集第７巻』 所収<913.68/A/7>

『美那登能波奈横濱奇談』

文化女子大学教授（文学・日本文化論担当）　近藤　尚子

横浜は2009年、開港150周年に沸いた。ペリーが軍艦4隻を率いて浦賀沖に来航してから5年後の安政5（1858）年に日米修好通商条約が結ばれ、翌安政6（1859）年に開港したのである。寒村であった横浜は一躍時代の注目を集め、横浜には多くのジャーナリストや絵師が集まり、たくさんの情報が発信された。『美那登能波奈横濱奇談』はそのような開国直後の横浜を伝える1冊である。作者「菊苑老人」はおそらくペンネームであろう。この筆名では本書1冊しか出版されておらず、なお探索の余地がある。また刊記はなく、いくつかの資料に文久2（1862）年あるいは文久3（1863）年刊行とある。18.5×12cm、本文は墨付29丁で、内訳は8カ国の国旗（カラー1丁）・洋銀直段荒増（2丁）・本文と外国人商館番附并人名（26丁）である。このうち洋銀直段荒増は、アメリカ、フランス、イギリス、ヲロシヤ（ロシア）のコインそれぞれ3種類ずつを掲げ、「直段」すなわち相場を示したものだが、今回調査した早稲田大学図書館所蔵の本2種には共にない。この2種も無刊記である。作者も刊年もよくわからないこの小冊は、しかし後に述べるような理由で注目すべき本である。

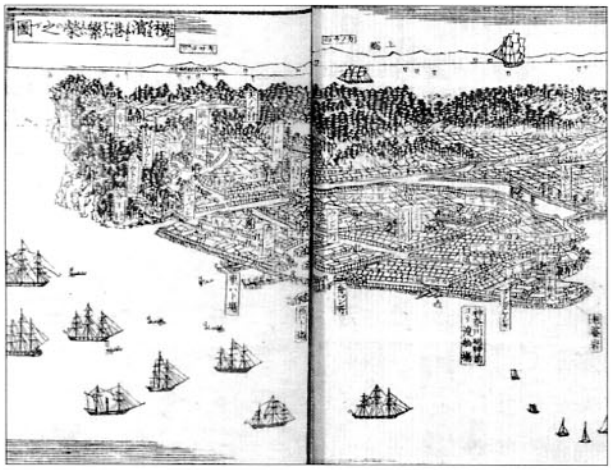
まず刊行の目的は序文に記されている（引用に際し漢字は新字体に改め、本文は総ルビに近いが適宜省略する。また、句点を付した）。横浜は開港以来「忽繁栄の地となり外異の国々万里の波濤を犯して渡来せしより我国になき異品奇談も多きを遠程の老幼は力及ばで終に見聞せざらんは遺憾なるべければ此に小冊をあらはして其形容をしらしめば長夜の話種ともならんか」という。開港から1年ほどでめざましい発展を遂げた横浜のようすは、本書の「横濱港繁栄之図」にうかがえる。そこには運上所と東西の波止場を中心に異人屋敷や異人墓所をも擁する横浜の姿が描かれている。本文の最後には「外国人商館番附并人名」があり、一番から百十番までの外国人商館と居住者の国籍・名前が掲げられている。このうち三十九番「亜ヘツポロン」とあるのは、医師であり『和英語林集成』とそのヘボン式ローマ字でも知られるJ・C・ヘボンである。文久2年に転居してきた。当時の横浜には国内外から人々が集まり、「我国になき異品奇談」も多くあった。それを実際に見聞きすることのできない「遠程の老幼」のためにこの小冊を著した、というのである。巻末にも「元来童蒙のために著す書なるをもて」とあり、これらの記述による限り老幼や童蒙のために概略を記した、ということである。本文は通商のようす（4丁裏）・開港の経緯（5丁表）・町の地理（5丁裏）・帯刀無提灯の禁止（8丁裏）・港崎遊女町（9丁表）・岩亀楼（10丁裏）・異人屋敷（11丁表）・異人の生活（11丁裏）・異人の旅籠屋（14丁表）・ゾンダフ（14丁裏）・異国船（15丁表）・異人の調練（17丁表）・競馬（17丁裏）・根付時計（18丁表）・写真鏡（18丁裏）・異人女性（19丁表）・異人小児（20丁裏）・ラシヤメン（21丁裏）・洋犬（21丁裏）・黒人（22丁裏）・天主堂（23丁表）・横文字のこと（24丁表）・アルファベットと数字（24丁裏）が図を挿入しながら述べられている。挿図は9図で、仮称するならば・横濱港繁栄之図（1丁裏～2丁表）・ブンダフの行進（2丁裏～3丁表）・港崎町遊女屋（3丁裏～4丁表）・異国船（6丁裏～7丁表）・写真鏡（9丁裏～10丁表）・小児遊戯（12丁裏～13丁表）・崑崙層刺遠眼鏡（15丁裏～16丁表）・本町北横丁よりの真景（19丁裏～20丁表）・天主堂（23丁裏）である。開港の経緯と町の地理を記した本文の中に、「僅五ヶ年にも満たざるにかく繁花の勝地となりし事」

（7丁裏）とあり、1859年の開港から5年以内の刊行であることが知られる。また、写真鏡についての記事に「弁天通り五丁目に居住する桜田蓮杖といふもの」（19丁表）とあるのは日本写真師の祖とされる下岡蓮杖のことである。蓮杖が弁天町に写真館を開業したのは文久2年の終わりごろとされており、これも本書刊行の時期を知る手がかりとなる。

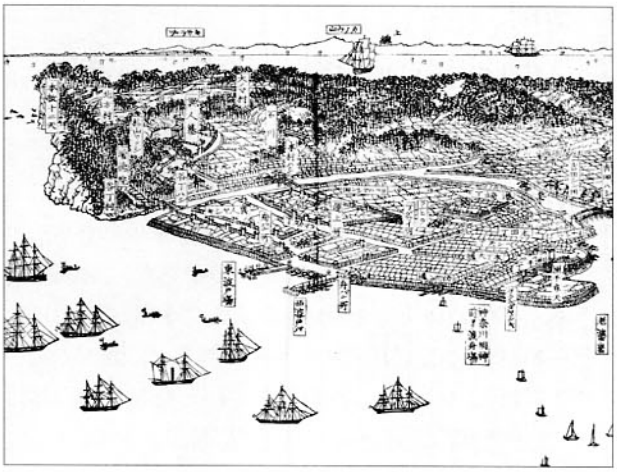
鳥瞰図である「横濱港繁栄之図」（下左）と共に読むとき、本書の地理の説明は具体的であり、格好のガイドとなっている。たとえば「偖入船町は吉田ばしの手まへなり。駒形町は御運上所の東也。芝居は北仲通り二丁目にあり。役者は江戸表より立者入かはり立かはり来りて定芝居たゆる間なし。相撲は太田町六丁目金毘羅境内にあり。これも四季の興行休むことなし。波止場は御運上所の前なり。異人の波止場は谷戸ばしの手まへ也。元町はほり割の向ふ増徳院の右手なり」（6丁表）とある。運上所を中心とした町の様子が調子のよい文体で描かれ、芝居や相撲などの賑わいも想像できる。このような横浜の繁栄と、「異人のようす」を伝えることが本書の眼目であろうと思われ、異人の生活についても詳細に描かれる。「異人朝暮の行状」は次のようである。「朝五ツ半時頃四ツ時頃に目を覚しすぐに入湯するなり。その湯のぬるき事ひなた水のごとし。中には暑寒ともに水ばかり遣ふものもあり。夫（それ）より常に懸置ところの姿見鏡＜丈四尺ほどなり＞にむかひうがい手水をつかひ髪を直しシャボン＜あかをとるもの＞または匂ひの水もつて薄化粧などいたし夫（それ）より服を着替る也」（11丁裏）。

また、異人の旅籠屋についての記述の中にはビリヤードの紹介がある。「其うちに五十畳敷ぐらいとも見ゆる大座敷ありて真中に長サ三間ばかり巾弐間ほどの机のやうなるものあり。回りのふち高さ弐寸ほどにて其すみずみに穴あり。其盤面に弐寸五分ぐらいの玉をおきその玉を相手と替り替り棒を以て突ば我玉と相手の玉とあたり合あたり合その玉穴に入るの次第にて勝と見へたり入らざるは負なるべし」。このほか根付時計（懐中時計）や写真鏡などの新奇な事物について紹介している。本書のタイトルに「奇談」とある通り、中には本当の「奇談」もあって、そのいくつかは後の俗説の震源となっているのである。

最後に図に関して述べておく。本書の図は、先行する類書や「横浜絵」、とりわけその第一人者であった五雲亭貞秀の『横濱開港見聞誌』（文久2年刊）（下右）の影響を受けている。貞秀自身が横浜絵を描くに当たっては長崎絵を利用した、と述べており、当時は剽窃（ひょうせつ）というような感覚はない。例を挙げておくので、両者を比較してほしい。



「横濱港繁栄之図」『美那登能波奈横濱奇談』より



『横濱開港見聞誌』に収められた鳥瞰図

奈良文化財研究所編　岩波新書　『奈良の寺 —世界遺産を歩く—』

文化女子大学助教（史学・博物館学担当）　田中　直人

2010年は平城京に都が遷されてより数えて1300年目にあたる。節目の年に沸く奈良の姿が様々に伝えられる中、古都を巡る旅行をお考えの方も多いのではないだろうか。本書はそうした方に是非ご一読いただきたい、第一線で活躍する研究者によるこぼれ話や見所ガイドを多数盛り込んだ、価値ある一冊である。

祭典のメイン会場となる「平城宮」にはかつて天皇居所（内裏）、儀式空間（大極殿）、政務中枢施設（朝堂院）が置かれた。120万㎡に及ぶ宮域には現在、正門の朱雀門と第一次大極殿、祭祀・饗宴に用いた東院庭園が復元され、はるか古代に想いを馳せるよすがとなっている。都市部の、しかも1300年前の遺跡がこれほど広範囲に保存されるのは世界的にも稀だが、そこに先人の大変な努力があったことはあまり知られていない。

保存活動の端緒は20世紀の初頭に開かれた。それまではかつて当地に天皇が住まわれ、律令官人が日々の政務に勤（いそ）しんだことなど地元の人間ですらほとんど知らなかった。廃都後の千年という歳月がその殷賑（いんしん）を跡形もなく奪い去り、一面を田畑に変えてしまったためである。地元住民からは農地を取り上げられることに対して少なからぬ抵抗があったため、保存活動の第一歩は平城宮跡の存在と価値を社会に認知させ、支持を得ることから始まることとなる。

活動の軸となったのは地元の植木職人棚田嘉十郎（1860－1921）である。棚田は大極殿の古瓦と平城京絵図を印刷した扇子を関係者に配り、また運動を全国に広めるため「平城遷都千二百年祭」を挙行した。さらに遺跡を開発から守るため土地買収の必要性を訴え、自らも私財を投じてこれにあたった。極貧生活を余儀なくされた棚田は晩年重度の病に倒れ失明までするが、献身の甲斐あって宮跡は1922年に国の史跡指定を受けることとなる。しかし保存の最大の功労者は指定前年に土地買収をめぐるトラブルに責任を感じて自ら命を絶っており、半生をかけた取り組みの結実する姿を目にすることはなかった。

「保存のための認知」「認知のための活用」。棚田以来の活動は現在も続いており、保存地域の調査や資料館・復元建物の建設、資源を活用したイベントなどが、より多くの人々に平城宮跡の存在を知らしめ、価値を認識させる意図の下に行われている。1998年、平城京地域の文化財は「古都奈良の文化財」として世界遺産に登録されたが、これも東大寺・興福寺・春日大社・元興寺・薬師寺・唐招提寺・平城宮跡・春日山原始林の8つの資産が、千年の時を越え保存される事実が高く評価された結果であった。

失われたものは失われたままに、存在するものは最小限の補修を加えつつそのままに。元のあり様を大切にする歴史的文化財の保存は、万人に分かりやすい形で行われるとは限らない。むしろ、他所で得た知識で補いながら見ることで初めてその意味を読み解くことができるものが少なくない。故に、予備知識のないままに見ると退屈に感じる人もあるかもしれない。しかし、見るたびに、また知識の量が増えるたびに、新たな発見があるのもこうした文化財の楽しみである。

奈良への旅は、「修学旅行」のように事前学習にしっかりと時間をかけて、できれば4泊、5泊でゆっくりと訪れていただきたい。そしてその際には、古都奈良の新たな魅力を教えてくれる同書をぜひ携えていただきたいと思う。

*岩波新書　新赤版 841